

点描

北海道50年の歩み—真宗同朋会運動— No.14

1978
昭和53年

「開拓」を講題に、北海道の歴史文献を読み込み、解放への祈りを語った藤元正樹師

北海道「開教」百年
自らの歴史を知る学び「藤元正樹『開拓』」

一九六九年(昭和44)、部落解放同盟による難波別院輪番差別事件の大谷派糾弾会が始まった。

三年間八回にわたる糾弾を受けた宗派は、一九七二年(昭和47)、同和協議会を各教区に設置する方針を宗議会で宗務総長が表明した。北海道教区が同和協議会を設置するのは、この表明から実に六年の歳月を要した。

この間の事情を相河恵昭氏(教区会議員、当時)は、「長い間本山と交渉して、北海道教区で同和問題として取り上げるのはアイヌ民族問題であると決定させてもらった」と述べている。

そして、一九七八年(昭和53)七月、日野賢愷教務所長が教区会において「先般の大師堂爆破事件の声明書でアイヌ民族に触れてありました。この点になりますと、当教区は全国何処の教区よりも先に取り上げねばならない、大事な社会問題です。そうしたことも含めて、同和協議会を設置して進ん

で頂こうと考えている」と表明。同年十月に第一回協議会(吉田法純会長・楠修副会長)を開催した。この時の協議で「北海道教区には部落差別の具体的事象がないが、アイヌ民族差別がある」との認識が表れている。

*

しかし、北海道ではなぜ部落差別問題が顕在化しないのか。

同和協議会は、北海道の歴史を検証する必要性を痛感し、藤元正樹師を招いて研修会を開催した。その内容は、一九八五年(昭和60年)教区同朋選書『開拓』部落差別とアイヌ差別』として発刊している。師は北海道には部落差別はないという意識に鋭く切り込んできた。

「東本願寺の爆破事件をおして、私の同和問題に対する関心は、アイヌ差別ということの持つ日本の帝国主義的国家形成の意義(帝国主義の形成は、必然的に植民地構造を要求するということ)への考察を込めて、北海道に被差別部落がないという構造的意味への開明が求められることになった。」「何故、北海道に被差別部落がないのかは、逆に、アイヌ差別

の存在ということに理由があるのではないか。言い換えれば、アイヌを差別することによって部落差別を解消し得たのではないか。だとすれば、むしろ、より差別を拡大したことなのではないか。「北海道が開拓の地として、近代国家形成のための逆説的役割を負わされてきた歴史は、それ故に、アイヌ差別を要求したのではなからうか。アイヌ同化策が、アイヌの歴史を、またその土地を奪うことにならなかつたのであるとするならば、一体、北海道開拓とは何だったのか。政治の力学は、常に、人と人との間に強者と弱者を予想せしめる。…そのことを如実に語るものが北海道開拓の歴史ではなからうか。そして、われわれの宗門の歴史も、その中で自らの体質を暴露しているのである。」

「いずれにせよ、自らの歴史を知ることが、これからの自らの歩みに心を尽くすことである。」社会的関係において差別を生み出し、社会意識としても差別を生み出す部落差別の内容をアイヌ民族差別に転嫁したのではないか。師の提起は、教区に重い課題として刻み込まれた。(文責・速水肇)